

あを 3

2201



寄稿

亀田虎童子

喧嘩相手欲しくなりたる寒さかな
老い止めの薬のありや初薬師
親と子の剥製なれど熊は熊
着脹れて手足短くなりけり
忘れざる坂の名雪に転がりて
干鰯裂く思ひ出二つ三つ四つ
縛られ地藏縛らず帰る雪模様

三月集

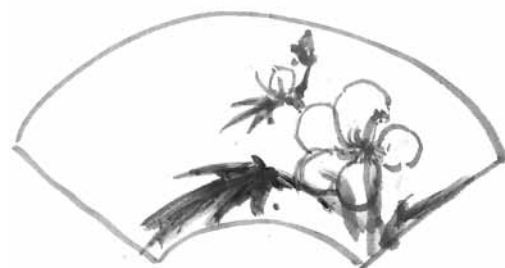
ひやり

佐藤 竹僊

簞をこぼれて道の竹落葉

剥く前のてのひらの柿山の冷

取り込みし干物ひやり小つごもり



惚の棒正月らしく青き空

切株のなりにちよこんと春の雪

凍蝶のうす目あけたるやうな午后

風花に雁字搦めの淨瑠璃寺

身の向きを変へたるらしき牛蛙 小島良子

藪中で曲りし音の春の川



お正月

田中藤穂

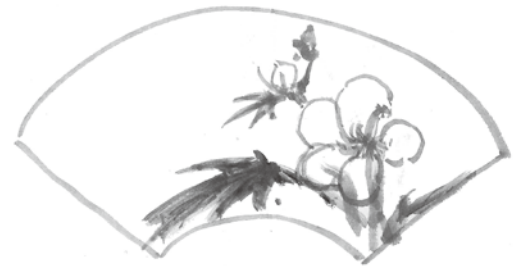
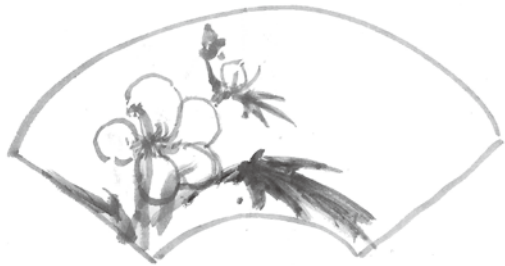
正月や兄どこからか出てきさう
夫在らぬ正月のはや二十年
冷蔵庫に食料いっぱいお正月
曾孫たちスキーに夢中といふ電話
さよならの年となるかも暦替ふ



初景色

長崎桂子

初茜二階の窓に合唱す
年重ね吾が郷の海初景色
初景色行交ふ車少なきや
隣人と堅い挨拶初景色
怪我もなき今日を願ふや雪安居
積雪十五センチ四度おそひ来し
肩窄め七種粥や願ひ込め
固い土持ち上げ物芽いと愛し



雑詠

森なほ子

日陰りてたちまち居間のうそ寒し
節分の一句得ざるは鬼のせひ
隣家より偏屈爺の「鬼は外」
明日よりは春の鳥なり寒鳥
立春や鶉の啄む昨夜の豆
千の蕾咲かせてみたしブロッコリー
バレンタインデー引いて馬鈴薯古歳時記



お正月

赤座典子

新玉の祝詞LINEで次々と
坊主捲り孫に教はる二日かな
松過ぎて絵馬はなやぎを残しをり
訪ひし子に鍋の締めなる寒卵
コロナ禍や籠り続けて去年今年



二年振り

秋川 泉

元旦や挨拶に来る茶トラ猫
寒風に負けじと歩く前かがみ
小さくて皿にのりさう寒の月
探梅や茶トラも三毛もついて来る
寒風にさらされながら話し込む
冬帽子の友走り来る二年振り
二年振り笑顔少しも変わらずに
二年振りブラックチョコの寒見舞



晦日より三日まで 大日向幸江

懸命に生きる猫の子拾ひけり
二匹めは初めましてと顔を舐め
いつまでも泥鰌ほしがる二匹めや
喪中なの呟く友や酒あおり
大酒を飲んだ友去る晦日かな
新酒持ち友来る二日化粧せず
はや三日大学マラソン見損ふ



初写真

七郎衛門吉保

いつもない玄関に花年迎ふ
黒髭にビンゴに歌留多初写真
寅年にあはせトラ焼き年賀客
初夢や干して枕の丁度良き
念を入れ両手両足つき初湯
あれやこれ賽銭足すや初詣
半世紀過ぎても北風の基地の街
咳一つ図書館の席一人置き



五黄寅歳

篠田純子

吾と息子五黄寅歳初神籤
初詣口開け見入るマルベル堂
ルーペもて源氏物語原文夜の長し
新刊の明朝体のウロコ冴ゆ
着膨れてアンドロイドの動きせる
亀鳴くや良妻賢母を教えられ
初烏わつはあはあと銀座路地



高速進行

篠田大佳

臨時列車高速進行雪時雨
雪しまく夜行列車の立往生
降る雪や銜学の士の独りごち
語り合ふ友なく雪は舞ひ上がる
汽車往くや孤独の人は雪を見る



一月や

須賀敏子

一月や銀座で句会あった頃
今朝も又雨戸の重き寒の内
白梅はまだ紅梅は三分ほど
目白来て鶴来て終はる実千両
駐車場見慣れぬ猫の日向ぼこ
長編の世界で遊ぶ冬籠り
のど飴を選ぶあれこれ松七日
気が付けば午前二時なり編始



俳收集

かぜあめは舊き友垣初氷 佐藤 竹僊
 天空へメタセコイヤの枯木かな 須賀 敏子
 酉の市へ寄るといそいそ帰りけり 田中 藤穂
 小春日やさくら堤に背を干す 長崎 桂子
 谷深し清水寺は冬日浴び 森 なほ子
 嬉嬉として孫を預かる年の末 赤座 典子
 湯の宿へひたすら歩き冬紅葉 秋川 泉
 小春日やいつもながらに入院中 大日向幸江
 大晦日残る半日第九聴く 七郎衛門吉保
 藤穂女史の化粧待ちをり冬薔薇 篠田 純子



揺れ鎮もり埃ゆつくり落つる冬 篠田 大佳
 スカイツリー冬霧まとひつつ灯る 田中 藤穂
 残る雪二日ありしの不自由に 長崎 桂子
 本堂に控ふ手焙織部焼 赤座 典子
 馬上より愛馬いたはる冬の暮 秋川 泉
 亡き兄の「生きる」と叫ぶ冬銀河 大日向幸江
 口紅も消えて街並マスクマスク 黒澤佳子
 夫と妻カレンダーのみクリスマス 七郎衛門吉保
 曇天のいてふもみぢのなほもみづ 篠田 大佳
 寒肥す静かに話し掛けながら 須賀 敏子



買うてきし蓮根に芽ありだうしやう

佐藤竹僊

蓮根の芽は、サラダにしていただと甘くて美味しいそうです。芽の断面はミニサイズの蓮根で可愛い形とか。農家さんのある地域に引越されたので、いろいろ珍しい野菜に出逢う体験をされているようです。新鮮な驚きが「だうしやう」に現れていて楽しい表現だと思います。(純子)

初夢に出てきて欲しき水見るひと

佐藤竹僊

「水見るひと」にはモデルがいると思われますが、読者がそれを知るために、作者より与えられたヒントが「水」です。占いでは、水は秩序的であつたり静的なイメージです。あるいは水道事業や水運や治水などの職業かもしれませんが、彼らも水の流れを読む仕事です。水は全てを見通す人というイメージを導出し、道導を欲している様子を想像します。(大佳)

事故ありて花壇のかから輝けり

篠田大佳

全きものが壊された驚き。交通事故であろうか。それは花を護っている花壇である。傷つけられた物の内部や、破片が曝され輝いている。死を暗示させている句と思った。(純子)

そぞろ集まり放課後の暮易し

篠田大佳

小中学の話では無ささう。高校の放課後のやうすのやうだ。暮易しは日短・暮早しと同義だが作例は少ないやうだ。「そぞろ集まり」といひ「暮易し」などと雅な言葉を使ふ志向の生徒の集まりか。気心の知れた仲間との会話はいかほど楽しいことだらうか。(喜孝)

時々ナビを無視して冬の旅

須賀敏子

GPSを用いたナビはとても便利で、ナビの言うことを聞けば、無難な旅を送ることができます。しかし、無難な旅だけでは物足りません。時折刺激を求めて寄り道したくなる旅の浮気心に、共感しきります。(大佳)

冬の陽のぬくもり両手にて受ける

田中藤穂

冬の陽は淡く弱々しいイメージです。光が弱いと、体も気持ちも鬱々としてしまいます。幸運にも降りそそいだ光をこぼさぬようにという動作に、心身とも作者の切実さが現れています。ぬくもりを受け取る切実さを持ち続けられれば、殺伐とした世界にも優しい光が注がれることでしょう。(大佳)

爽やかや少々五体かたくなり

長崎桂子

さわやかな季節感に、眠りが少々深くなった作者を想像します。暑い時期に体を動かして解れていた体を涼しくなって再点検したら、ちよつと動きが固く感じられたと読みます。適度な労働を続ける作者の生活が見えてきます。(大佳)

席一人分の権利とホットティー

森なほ子

カフェーでいくらか払う飲み物代を言語化すると、掲句のような内訳になります。言語化することで、日頃考えもしなかったことが新たな発見されて驚きがあります。サービスとは何か。そんなことを考えさせられます。お金の価値について再考する時だからこそ一層、掲句は読者の考え方の幅を広げてくれます。(大佳)

シニヨンに銀のひとすぢ小春風

赤座典子

お団子頭というと男性にも理解が早いですが、シニヨンに結った髪にちらりと見える銀のヘアピンをズームして、小春風がシニヨンに吹いています。ヘアピンの銀色は銀髪に合わせた色合いですが、銀色のヘアピンの輝きが小春に映え合います。(大佳)

陽水をAJICOがカバー冬の月

秋川 泉

AJICOは、テレビ番組で井上陽水氏のレパートリーから「リバーサイドホテル」をカバーし

たようです。浅井健一氏のグレッチギターの弦の振動から、冬の闇に月と電飾に淡く灯された妖艶なナイトプールが浮かんできます。ロックンロールを俳句に翻案することは難作業が伴いますが、掲句は特に作者の感動を大事に読みたいのです。(大佳)

この朝に初冠雪の富士を見る

大日向幸江

病中の連作より、富士山が見えたとの作者です。「この朝」の感情に対する想像の幅は広いですが、いい気分ではなかったことを想像させます。病中、不意に見えた希望は心に残り、何度も人間の力強さを思い出させてくれます。(大佳)

今宵また殿様になる干蒲団

七郎衛門吉保

布団を干した日は布団がふかふかになり、殿様のような気分を味わう作者です。布団のふかふかの楽しさを殿様に返り咲いたような高揚感として諧謔にした句と読みます。布団が硬くなると居城を明け渡し、天気の良い日に布団を干すと、また居城に帰ってくる波瀾万丈さです。(大佳)

秋の苑地を行く鷺とすれ違ふ

篠田純子

鳥と地面ですれ違う経験は滅多にないことです。野生の鳥は人間を警戒して空を飛んでしまうことがあります。一方で、公園を縄張りに行っている鳥は、溜まり場で知己とすれ違う気軽さですれ違

うことがあります。掲句の感動は人の少ない場所と時間帯で、しかも、ほぼ野生であろう鷺となれば、相当貴重な経験でしょう。（大佳）

インバネス七郎衛門吉保ぞ

篠田純子

純子さんは挨拶句をよく作られる。この句は句会で初見した。多くの人に分かって欲しいと作る句と、ある一人にだけわかってもらへれば目的達成といふ句もある。後者のひとつに悼句があるがせんないことだ。この句は後者の句に近い。「七郎衛門吉保」という固有名詞と「インバネス」でしっかりとはる。このやうな挨拶句は悼句より百倍もいや千倍もよい。一月・二月号の拙句は会員名の一字をかりて遊ばせていただいた。（喜孝）



佐藤喜孝

はしたて集は第一義に句を通じて作者と筆者の会話の場と思ひ、書かせてもらつてゐます。

田中藤穂

手作りの葩餅を風呂敷に
桜の芽ほのと息づく気配あり

○風呂敷包はぶら下げない。手のひらとかひなにのせてしづしづと運ぶ。風情がよい。風呂敷の中はほのと紅が透けて見える葩餅。しかも何と手作り。これでは俳人としてあいさつ句を一句作らねばならぬところ。金沢市で風呂敷包を胸に抱へ着物姿の人を見かけた事がある。思はずシャッターを切った。あるネット店舗で葩餅の販売期間は十二月三十日から一月三日とあった。

○春の声を聞いたからといって見た目からは桜の花芽は頑なに冬の様相。でも藤穂さんの心眼で視ると春の気配を覚えるのである。けふは三月四日、桜ではないが櫟の芽を見てきたが私にはまだまだ頑なに閉じこもった冬芽にしか見えなかった。心眼が曇つてゐるのだらう。

長崎 桂子

陽 射 あ り 鏡 開 の 舌 鼓
夜半すぎの警報列島に寒の津波

○鏡開といへばすぐお汁粉が浮かぶが鏡汁かもしれない。大勢の子供たちのうれしさうな顔。本当に舌鼓が聞こえてきさう。「陽射あり」と断るほどの温かい光景でした。

○実際の警報が鳴ったのだらうか。今はテレビを見てゐて津波の警報が入り番組が中断することもある。スマホにも地震や津波の警報が入る。自然災害の警報とは違ひ、空襲の警報に逃げ惑つてゐる国もある。警報をオオカミ少年と侮つてはいけない。桂子さんも経験から警報には敏感に反応するのである。

森 な ほ 子

立 春 や ワ ク チ ン を 待 つ 群 静 か
芭蕉より一茶好きな日セロリ噛む

○三月五日、いま三度目のワクチンを打って帰りに買ひ物をしてきたところ。私は個人医院に打っていたので群にはならなかったがそれでも次々と高齢者が接種しに來た。接種の瞬間を映像で見ると痛さうで緊張する。打ってもらう方が楽。昔の注射より格段に痛くない。コロナ以前なら嫁批判や孫自慢で賑やかなことだが、今はまさに「群静か」である。

○「好きな日」の「日」が面白い。無ければ私は芭蕉より一茶が好きで済んでしまふ。この日があるとなほ子さんの移り気が見える。今日はなぜだか一茶びいきになつてゐる自分がある。セロリは何となく芭蕉より一茶に合ふやうな気がしてくる句である。

赤 座 典 子

南 の 島 く ま な く 照 ら せ 寒 満 月
南 の 島 より 津 波 の 来 る 小 正 月

○今年の一月十六日トンガが津波に襲はれた。その時の思ひを詠まれたとおもふ。そしてその津波が日本へも辿り着いた。海が溢れる映像はなんとも異様。日本の自衛隊も救助物資を運んだことをニュースで知った。この句を読んで申し訳ないが遙か昔の事のやうに感じた。いま、ニュースも私もロシアのウクライナ侵略に関心が移ってしまった。忘れっぽさを反省してゐる。

秋川 泉

マイカーの夜更けの姿雪達磨
雪掻きは深夜が勝負カリカリと

○雪の降る中、マイカーの様子を確認のためか夜中に起きて駐車場へ。来てみるとすっぽりと雪に包まれてゐる自動車。まるで雪だるまだと驚いてゐる句。愛車のかわいい？姿に一驚。

○深夜起きて雪かきをする。朝の通勤、通学の通路を確保するためである。雪は「カリカリと」音を立ててゐるで、凍り始めてゐることが知れる。泉さんの健康な姿も目に浮かぶ。

大日向幸江

大晦日家族が集ふ窓明り
泥鰯鍋食べる夫の声高く

○大切に思ふ窓明りである。一年の締めくくり、そして新しい年への期待の夕餉の団欒。とこしへと願ふ一句である。

○奥様手作りの泥鰯鍋である。泥鰯鍋が好物の夫のうまさうな声が響く。それを完爾と見守る妻。まさに団欒の様子がほのぼのを伝はる一句だ。私の父も泥鰯が好きだったことを思ひ出した。しかし厄介なのである。いかつい顔なのに泥鰯の丸ごとは食べられないのである。でどじょうを割いてもらって作った柳川を「声高く」食べていたことを懐かしく思ひだした。

七郎衛門吉保

遠き島より流れ寄る寒の波
トンガ島再起を願ふ実南天

○人口に膾炙した歌詞の冒頭を借りてこの度の自然大災害を詠はれた。七五七の変調子である。意味にあまり違ひがないので「寒の波遠き島より流れ寄る」では。

○トンガへの素直な応援歌となっている。南天の赤い実を添へて。

須賀敏子

背を正しゆっくり歩む喜寿の春
今年こそ何処か遠くへ街歩き

○春になった解放感。喜寿の背筋を伸ばして歩む心地良さ。若人は若いなりに歩く姿を気にする。高齢になると背筋を伸ばして歩くんだぞと自身に命令をするやうになる。若々しい敏子さんがそんなことをおもふのかと不思議に思った。

○私も旅心に誘はれるこの頃である。自身の体力に合った旅を夢見る。この句、春の気配を感じるがやはり季語があると落ち着くことだろう。

篠田大佳

寒鴉人に甘えることもある
くづれないこほりのなかの原始時代

○鴉と人間は仲が悪いといふ先入観があるが、頭脳明晰な鴉ゆゑの気味悪さがさうさせてゐるのか

もしれぬ。しかしよく観察といふか、フラットな気持ちになつて鴉を見てゐると面白い。句中の鴉はどんな甘え方をしたのだらうか。そちらの方に私は興味がある。

こんな鴉だが子供向けの歌の中ではさうでもない。『七つの子』（からすなぜなくの）・『からすの赤ちゃん』（からすのあかちゃんなぜなくの）・『夕焼け小焼け』（ゆうやけこやけで……からすといつしよにかえりましょ）・『烏』（カアカアカアカラスガナイテイク）と親しまれてゐる。なぜなのだらう。

○南極大陸を覆ふ氷は雪が降り積もつて重みで固まり氷になつたとか。厚さは平均二五〇〇メートルほどうしい。この氷を調べると降り積もつた当時の大気の状態が解り、地球の歴史の解明の一助になるとか。空気の化石みたい。掲句はこんな話と関係があるのだらうか。

楽器

遊びながら

篠田大佳

家には楽器がたくさんあります。自分が使う楽器は、ギターとキーボードです。触つてからの歴は長いですが、まだそんなに上手くはならないものです。たまに曲を作ったり、「ピー」をしたり、遊びながらゆっくり付き合っています。

カリンバ

秋川泉

七歳までは夢の中と言つモンテッソーリーの教育を表現した会場に行つたときの事。繭玉の中にあるような母衣蚊屋を張つた中で、アフリカの民族楽器カリンバに出合つた。反響する小さな木箱に細い長短の金物が並べられ、それを爪弾く。単調であるが不思議と安らぐ音色。私はそれを二台購入した。同じ形状でありながら音色が異なる。アフリカの大地で魂に届くような音色のこの楽器を人々は奏でているのだろうか。私は、やさしい母衣蚊屋に包まれていたあの場所で、いつまでもカリンバに触れて、魂を守られていたかったのだと今も思う。

三味線

篠田純子

15才位の時ビートルズが来日し、母は私にエレキギターを買ってあげると言い出しました。それより、義太夫三味線を習いたいと頼みましたら、近所に三味線の音がするから行きなさいとの事で、訳も分からず入門しました。長唄三味線の師匠は、戦争未亡人でお子さんも無く、随分可愛がつてもらいましたが、現在は芸は錆びつき、三味線の皮は破けっ放しです。久保田万太郎作詞「都風流」と言う曲が好きです。

あをキーワード俳句辞典(ほそ—ま)

細身

初空の細身の富士や駿河湾
お狐は細身でありし白日傘
黄落やウエイトレスの細身なる
終咲き奈良に細身の阿修羅像
金メダルの走者細身や冬陽浴ぶ
吾が影は細身の巨人冬日浴ぶ
ひとしきり裸木揺らす鳥細身

細道

沼へゆく細道霧にふさがるる
梅日和天神様の細道じや
蠅の町細道よぎり寺を訪ふ
文字なぞる奥の細道梅雨の入
青あらし「奥の細道」書写す
諳ずる奥の細道今朝の秋
どこまでも続く細道春の闇
三つ四つ余花の細道風の渦
真つ直ぐにのびる細道月のぼる
石楠花へ曲る細道三輪車
細道はかつて旧道葛の花
角入れば細道を黄に迎春花

松本 米子
堀内 一郎
後藤 志づ
田中 藤穂
田中 藤穂
山莊 慶子
赤座 典子
田中 藤穂
堀内 一郎
渡邊 友七
長崎 桂子
鈴木多枝子
田中 藤穂
秋川 泉
長崎 桂子
秋川 泉
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂

七五三難産でしたと目を細む ほそぼそ

早苗饗をぼそぼそと言ひ腰上げる
年玉の礼ぼそぼそと受験生

間

草じらみいつの間にやらふたつみつ
つかの間の消えしせせらぎ春の雪
獺犬の吠えて間もなく銃二発
夜桜やあつといふ間に一生過ぐ
間に合ひしローカル車輛秋暑し
いつの間にうしろへまはる飛行船
鬼灯を揉んでゐる間も母のこゑ
夕焼けて穂高の峰や指呼の間に
奥入瀬の水はげしくて澄む間なし
ひたすらに眠る合間の葛湯かな
間遠なる夜の車道や冴返る
新緑の濃淡に間のありにけり
青時雨まだ間に合ふか種を蒔く
新緑につかの間犬を撫でてをり
朝の間に脱皮をいそぐ蟬みどり
いつの間に駅名消えて赤のまま
妊娠を告ぐる間合に黄落す
吊されし秋灯客とわれとの間

石森 理和
長崎 桂子
赤座 典子
鈴木多枝子
森 理和
須賀 敏子
田中 藤穂
松村美智子
佐藤 恭子
竹内 弘子
須賀 敏子
早崎 泰江
赤座 典子
長崎 桂子
長崎 桂子
須賀 敏子
山莊 慶子
関口 ゆき
鈴木多枝子
篠田 純子
高橋 信佑

束の間の夢は終わりぬ牡丹雪
 点滴の長き間合を春夕焼
 開花日と聞いて間なしの彼岸寒
 陽春の集ひへ漸う間に合ひぬ
 間のびせる鴉の啼くや昼寝寛
 一分の黙黙袴の間の蟬しぐれ
 束の間の恋のまばたき蛍の夜
 ねむる間に葉月の過ぎる真夜の月
 立ちしままバスを待つ間の夕時雨
 ひと年のあつといふ間のちゃんちゃんこ
 語らいひの沈黙の間や桜餅
 束の間に過ぎゆく日々よ花水木
 つきあひのいつしか間遠蒨草
 間を空けずおたまじゃくしを敷き詰めし
 間をとりて付き合ひて居りうらけし
 落語家の間のある語り文字摺草
 春の午后束の間ねむるくせつきて
 留守の間に温度差うまる柿若
 夢の間のソシアルダンス春の宵
 夜桜に酔ひてつかの間女旅
 父に似し弟も逝けり春の間に
 四顧の間の天を指さし松の芯
 氷上の技の間の技イナバウアー

早崎 泰江
 田中 藤穂
 鎌倉喜久恵
 赤座 典子
 早崎 泰江
 木村茂登子
 森山のりこ
 渡邊 友七
 芝 尚子
 芝 尚子
 齊藤 裕子
 芝 尚子
 田中 藤穂
 森 理和
 長崎 桂子
 森 理和
 木村茂登子
 齊藤 裕子
 森山のりこ
 森山のりこ
 鈴木多枝子
 木村茂登子
 木村茂登子

糸遊や間遠な山に雪のこる
 スライディングジャッジ待つ間の春埃
 はたした神間遠くなりて山暮るる
 一生はあつと云ふ間に金木犀
 何時の間に芒の波に溺れ込む
 何時の間に古りてゆくもの冬帽子
 飴を切る音の裏間に咳をする
 バス停で待つ間に銀杏ニツツ
 留守の間に愛媛みかんの届きけり
 終てふはあといふ間の小春かな
 客居ぬ間コブラの伸びし石畳
 酒を煮る雑煮の出来る間を惜しみ
 束の間の鬚の仙人桜東風
 一つの間に聞き上手なり草の餅
 絶え間なき河鹿聞き入る旅枕
 山の駅電車待つ間の地虫鳴く
 束の間の秋を探しに佐久平
 付合の間遠になりし雑煮かな
 春の朝鴉の声の間のびせり
 留守の間に牡丹咲き満ち姉逝きぬ
 寝落つ間の山音太り青葉木菟
 絶え間なき車の流れ葱坊主
 牛蛙日なか間のびし声交す

佐藤 恭子
 篠田 純子
 森山のりこ
 早崎 泰江
 鎌倉喜久恵
 芝 尚子
 篠田 純子
 鎌倉喜久恵
 竹内 弘子
 東 亜未
 森 理和
 鎌倉喜久恵
 森 理和
 須賀 敏子
 芝 尚子
 吉成美代子
 森山のりこ
 竹内 弘子
 山莊 慶子
 早崎 泰江
 渡邊 友七
 芝 尚子
 森 理和

下石神井日録 6

佐藤 喜孝

二月〇日。近くに観蔵院と言ふ寺がある。曼荼羅寺として知られてゐる。図書館の帰りによく歩を留める。遠目の境内の二本の松の裾を紅梅が賑やかしてゐる。駐車場の脇に白梅が咲いている。近寄つてふと白梅の根元を見ると黄色いものが落ちてゐる。よく見ると丈が一寸にも満たない可愛い福寿草だ。なほよく見ると二つの間にもう一つちよこんと福寿草の子が覗いてゐる。川の字に並んだ福寿草の家族。数日後よつたらもう花は終わつてゐた。さう湯島のしら梅の根元にも福寿草が咲いてゐた。向日葵より福寿草の方がお日様を間向ひにして咲く花だ。

三月〇日。近くの農家の自販機に今日は何が並んでゐるかなと行つてみた。冬で売り物がないやうでシャッターが降りてゐた。さう結構大きな無人販売所なのです。諦めて脇を見ると梅がまぶしい。観蔵院の

梅は整枝された見目良い梅だが、ここの二本の梅は正に野梅。つい自転車を下りて寄つて行きたくなる。ここでも下を見る。杖をついているので足元を注意する癖がついている。なんと落の臺がいっぱい日を浴びて点々とある。誰もぬないのでせうがない。数個摘ませてもらった。落味噌をネットを参考に作り美味しくお酒をいただいた。



あとがき 寄稿について

今月より亀田虎童子様の作品を掲載できることになりよろこび一入です。先月にお知らせ済みですのでご紹介の意
味で写真を一葉。



亀田虎童子

高島 茂

佐藤喜孝

小島良子

写真

木村嘉男

田中藤穂様転居について

永く長くお住まいの田端から世田谷区大蔵一丁目六の「ガーデンテラス砧公園」に転居なさいます。私に次いで藤穂さんも新しい環境にこれからの夢を託します。田端のお住まいを目に残したく息子に自動車を出してもらひ自慢の糠漬をもって伺ひました。庭の薔薇や福寿草、都忘れなどにお別れをしてみました。帰りにちゃっかりと木瓜の実を拾ってきました。種を蒔いてみます。落ち着かれたら砧にお伺ひし、句会ができる場があるか調べに行きたいと思つてをります。今窓を開けると向かひの家のミモザが葉の翠と調和して心が和みます。たしか藤穂さんもミモザの花がお好きだったと記憶してゐます。

一人ずつに今日といふ日よ花ミモザ

田中藤穂

(喜孝)

二〇二二年三月号

発行日 三月二十二日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
電話 090 9828 4244
印刷・製本・レイアウト サンハイツ石神井2 一階

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)